OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜紹介＞中山一麿編　『神と仏に祈る山一美作の古刹　木山寺社史料のひらく世界一』
Author(s)	後藤, 京
Citation	語文. 2017, 108, p. 109-110
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/71014
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

中山一麿編『神と仏に祈る山―美作の古刹　木山寺社史料のひらく世界―』

後藤　京

本書は、美作の国（現在の岡山県北部）の古刹・木山寺社の開創一二〇〇年を記念して刊行された書物である。

本の内容紹介に入る前に、まずは、テーマに据えられた木山寺社について説明する必要があろう。書名に用いられた「木山寺社」とは、「木山寺」と「木山神社」の併称である。これらは、現在では二つの組織に分かたれているけれども、明治時代の神仏分離政策以前は、「木山宮」と呼ばれる所在地・由来・歴史を同じくする神仏習合の聖地として存在していたのである。

では、木山寺と木山神社、各々の縁起について説明したい。まずは、木山寺から述べていこう。元禄四（一六九一）年成立の地誌である『作陽誌』は、木山寺の創建を弘仁年間（八一〇～八二四年）と伝えている。これに対して、同寺の縁起は、その開基を弘仁六（八一五）年とする。その縁起によると、美作の地を訪れた高祖弘法大師が、木樵姿の翁に化した薬師如来に導かれ、同寺を建立したことになっている。一方の木山神社は、弘仁七（八一六）年に京都祇園にある八坂神社の御分霊を祀ったのがその起源とされている（異説では、延喜七（九〇七）年）。弘仁年間といえば、平安時代前期の嵯峨・淳和天皇朝にあたる。平安時代から現代にいたるまで長い歴史を有するだけに、木山寺社の歴史を調べることで地方史や中央の政治史も辿ることができる。それは、一地方の古刹ゆえの魅力であろう。

以上、木山寺社の歴史を簡単に述べたので、本の内容に言及したいと思う。先述したように、本書は、木山寺社の開創一二〇〇年を記念して発行された。その体裁は「図録編」「研究編」「資料編」から成る三部構成である。目次を次に提示した。

緒言
図録編
　図録
　図版解説
研究編
　木山をめぐる寺史と神社史―地域的な観点から―
　木山寺の中世古文書について
　　コラム　狐とお稲荷さん　序
　神仏習合の進展と木山寺
　　コラム　お寺と「神道書」
　木山寺の経典と漢籍―『瑜祇経』および『呉子』について
　　コラム　狐とお稲荷さん①
　伝授史料から見る木山寺経蔵の史的一端
　　コラム　狐とお稲荷さん②
　木山寺所蔵の日光院・増長院旧蔵聖教と真躰房無動
　　コラム　狐とお稲荷さん③

木山寺と美作・備中・備前の真言宗寺院との関わり
木山神社の神像とその周辺
　コラム　木山の門番
　コラム　狐とお稲荷さん④
資料編
　訓解『木山寺文書』
　木山寺・木山神社　棟札集成
　木山寺先徳記録
　『差上申一札之事』
　『末社住職願幷旦中御願控』
　神仏分離関係史料
あとがき
執筆者紹介

その体裁からして、編者の中山一麿氏が言うところの「図録でもなく、研究書でもなく、読み物でもなく、資料集でもなく、その何れをも内包しつつ、一つの世界を織りなした」（「あとがき」参照）書物であることがわかる。この数多の要素を全て満たすために、中山氏は、十二人の執筆者（以下五十音順　伊藤聡・落合博志・柏原康人・苅米一志・木下佳美・向村九音・鈴木英之・中山一麿・森俊弘・山崎淳・吉永隆記・和田剛）に対し、三つの方針を提示した。

①木山寺・木山神社の研究の現在地をできるだけ網羅した、木山研究の基本書を作る。
②在地信仰にとどまらず、より広い視点から山岳信仰・神仏信仰の共通性と木山での特殊性を明確にしたい。
③一般読者の読み物としても楽しめる内容を備え、木山信者にも親しみやすい書籍とする。

（「緒言」参照）

これらの目標は、各人のものした論文によって達成されたと言える。本書は、これまで注目されてこなかった木山寺社の価値を顕彰する書物である。

（法藏館、二〇一六年十一月、二、八〇〇円＋税）

（ごとう・みやこ　本学大学院博士前期課程）